郷土文学館館長　新任挨拶

平成 29 年４月から指定管理者制度による運営がスタートした。株式会社図書館流通センター（TRC）、アップルウェーブ株式会社、弘前ペンクラブの三者による共同事業体を担当することになり、元㈱TRC 北海道責任者の私が、郷土文学館、弘前市立図書館（本館、岩木図書館、こども絵本の森）の館長を務めることになった。

三者共同体が運営を担ってから５ヶ月になろうとしているが、この三者の連携は早くも効果をあげ始めている。例えば、今年度の郷土文学館の企画展である「石坂洋次郎展」については、その企画に呼応するかのように FM アップルウェーブが、6月3日から「ラジオ図書館/石坂洋次郎の世界」の放送を開始。企画研究専門官櫛引洋一さんによる石坂作品の解説と朗読が始まった。そのタイミングにあわせて弘前図書館では、コーナーを設けて石坂洋次郎の著作をすべて館内展示した。この展示はその後、岩木図書館に巡回して広く市民に紹介をした。

これは一例にすぎないけれど、４月にスタートして２ヶ月後にはこのようなチームプレーを実現させている。今後も三者の連絡を密にして、郷土文学館、弘前図書館に来館されるお客様に、今まで以上に愛される施設に成長していきたいものだと思っている。　〈山谷　英雄〉

お客様の声

H29.4 月～8 月

平川市・女性
とても楽しかったです。
詩が大好きなので、
また来たいと思います。

男性
ここはいつも見ごたえがある。今回の石坂洋次郎エッセイ集の展示は抜粋の文がとても良かった。うまい所を取っていると思う。

仙台市・男性
横手の文学館にも数年前に行きましたが、好きな石坂洋次郎さんに思いがけずここで逢えて嬉しく思います。

千葉県・女性
ゆっくりと十分楽しめました。まだ読んでない本があり、次の楽しみもいただき感謝します。

弘前市・男性
文学館というところへ初めて入館しました。
文学をあまり知らない私ですが、以前より石坂先生のことを知ることができて、良い機会になりました。

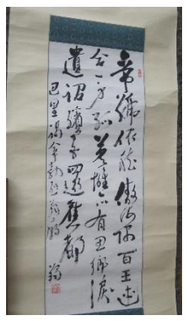
弘前市・男性
大変洗練された空間だと思った。
『青い山脈』しか見たことがないので、
他の作品も見てみたいと思った。

参加者募集

11 月3日（金・文化の日）
郷土文学館主催「文学散歩」
を開催いたします！

「石坂洋次郎　ゆかりの地を訪ねて」と題し講師に斎藤三千政氏を迎え、各所にて解説を聞きます。当日 9:30 集合（文学館前）、10:00 出発、12:00 解散。申込は電話と文学館窓口にて受付、申込締切 10 月 31 日（火）
定員 30 名（先着順）、参加料無料。
文学に興味のある方どなたでもご参加頂けます。
〈お問合せ〉弘前市立郷土文学館
TEL0172-37-5505　　担当　企画研究専門官
櫛引　洋一

新資料紹介



10 月 1 日～11 月 30 日までの新資料展示をご紹介いたします。

先般、新聞にも掲載されました新資料・陸羯南自筆の漢詩書軸を、常設展示室内にて特別展示いたします。

この書軸は陸羯南研究会の髙木宏治主筆が入手したもので、陸羯南自筆の書軸は極めて少ない上、パリのナポレオン廟を拝謁したという新事実も分かる漢詩です。この機会にぜひご来館の上実物をご覧ください。

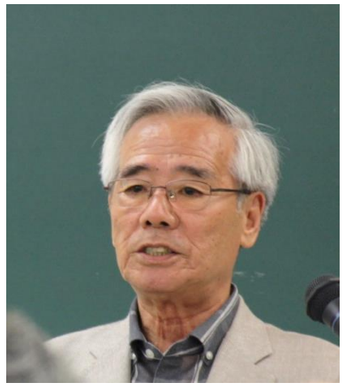
北の文脈ニュース　第77号

Kitano bunmyaku news

第４１回企画展「石坂洋次郎展－『青い山脈』70 年－」記念講演

青い山脈 70 年 ― 徳田秋声・葛西善蔵・石坂洋次郎 ―

講師：森 英一　氏（金沢大学名誉教授）



第４１回企画展「石坂洋次郎展　―『青い山脈』７０年―」記念講演が８月１９日、弘前市立図書館視聴覚室にて開催されました。

講師の森英一氏は１９４５年弘前市に生まれました。現在は金沢大学名誉教授としてご活躍の傍ら金沢近代文芸研究会代表も務めておられます。主な著作に『石坂洋次郎の文学』『秋声から芙美子へ』『小説維新の彙』他があります。

小説家石坂洋次郎の代表作「青い山脈」（１９４７年）は、朝日新聞社からの連載依頼の際二つの注文を受けました。一つは国民に健康的な娯楽を与えたい、二つ目は民主主義を理解させられる内容であって欲しいというものでした。しかし、石坂にとってその二つの条件は、自分の中では１０年前にすでに完成した自身の文学観に基づくものであり、連載に登場させようという意味では、石坂が社会に合わせたのではなく、社会が終戦で１８０度転換したことによるものであると森氏は強調します。また、その文学観は弘前の先輩作家葛西善蔵との出会いと別れに起因していることであり、さらに葛西善蔵の文学は金沢出身の作家徳田秋声に学ぶところが大きくあると話されました。

徳田秋声は、事実をありのままに書く「自然主義文学」という、明治４０年当時はまだ新しい書き方で作品を出しています。オノマトペの多用や写生文を用いた自分独特の文体、文章をあみだし、その集大成が「新世帯」という作品で秋声の出世作でもあります。葛西善蔵は、第１作の「哀しき父」という作品で倒叙法という書き方やオノマトペを多用し、当時「徳田秋声の倒叙法を真似している」と批評されました。しかし、秋声の文学からどのように書くかは学べても、何を書くかは善蔵の個性、生活、環境等が関わってきますから彼自身のものであり、秋声のものではないと森氏は言います。

石坂洋次郎は大正１２年、あこがれの作家葛西善蔵を訪ねて鎌倉や、その後の本郷の下宿へも行き原稿を見てもらっています。大正１４年、帰弘した石坂を訪ねて善蔵が弘前の旅館に滞在した際には全ての面倒をみていました。善蔵が帰る時、石坂から代作としてもらった「老婆」という作品にも倒叙法やオノマトペが繰り返し登場します。

石坂は昭和１２年「若い人」を発表し、その前後に執筆・発表した「麦死なず」「金魚」を書き切ることにより、葛西善蔵の影響とプロレタリア文学・左翼思想、二つの観念病を振り切り、「当たり前のことを当たり前に書いた文学を自分の文学」と定めました。森氏は、「青い山脈」はこうして獲得できた文学作品であり、この文学観が戦後も通用するか問うてみようと考えた、と推察されました。

講演会は追加席を設ける程、多くの方々においでいただきました。ありがとうございました。

平成 29 年度 スポット企画展

石坂洋次郎 ―エッセイに見る素顔―

平成 29 年７月１日～8 月 31 日

弘前市出身の作家・石坂洋次郎は、昭和 14 年『雑草園』（中央公論社）を皮切りに昭和 52 年の『老いらくの記』（朝日新聞社）まで 15 冊のエッセイ集を刊行しています。

「自分は今ぼんやりと考えている。
それは出来るだけ一般の人々を喜ばせる小説を書きたい
といふことだ。（略）」（「短い感想」）

小説とは異なる〈普段着〉の文章からは、石坂の人物・生活・文学観・社会観など、その「素顔」を垣間見ることができます。石坂の文学に焦点を当てた企画展「石坂洋次郎展―『青い山脈』70 年―」とエッセイを併せて〈人間〉石坂洋次郎に迫りました。

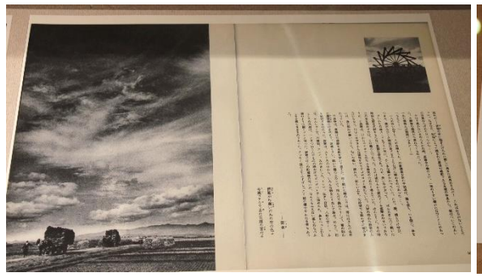
当展示では各エッセイ集の中から印象的な文章を厳選し、紹介しました。その他、関連する石坂の写真や関連資料なども展示しました。

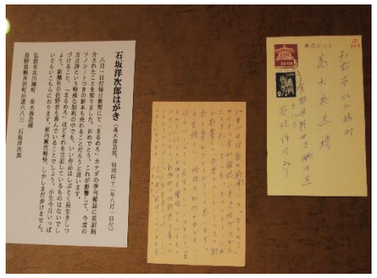
没後 30 年　高木恭造 ―方言詩と石坂洋次郎―

平成 29 年９月１日～11 月 30 日

津軽方言詩の金字塔である高木恭造の詩集『まるめろ』は、詩人・福士幸次郎の〈地方主義運動〉の展開の中で生まれました。若き日の石坂洋次郎は、「地方主義の行動宣言」（大正 15 年）にその名を連ねています。

石坂は、昭和 13 年発表の小説「闘犬図」（『改造』）の作中に高木の方言詩「生活」を登場させています。また、昭和26 年刊行の『石中先生行状記（全一冊）』（新潮社）の随所に方言詩の欄を設け、石坂自身の方言詩「人生」も掲載しました。さらに、昭和 38 年には、高木の方言詩・石坂の文章・小島一郎の写真で構成した『詩・文・写真集 津軽』（新潮社）を刊行し、〈津軽のエスプリ〉を広く世に伝えました。





本展は、没後 30 年を迎えた高木と石坂の関わりを中心に、石坂洋次郎と方言詩をテーマに紹介します。

開催・展示中！

次回スポット企画展のお知らせ

新資料収蔵展

平成 29 年 12 月１日～平成 30 年３月 31 日

新資料の紹介
齋藤吉彦の草稿　400 字詰原稿
大正８年か９年頃のものと思われます。

草稿には、齋藤吉彦が東京・南台寺の石坂洋次郎の下宿を訪ねようとしていることが書かれています。

新資料収蔵展ではこの草稿をはじめ、書簡など『齋藤吉彦全集』未収録の資料を中心に展示予定です。

平成 29 年度 北の文脈文学講座

第 2 回　石坂洋次郎〈初公開資料〉

講師：櫛引洋一（企画研究専門官）
6 月 17 日（土）

石坂洋次郎の原稿 2 点と、井上靖の原稿（石坂洋次郎文学記念館蔵）を読み解きました。

石坂洋次郎の原稿は、昨年秋にご令孫から寄贈いただいたものです。1 つは石坂 76 歳の執筆と推定され、戦後の弘前、特に米軍将校との交流や家族の様子が描かれています。講座を終えた人々は早速、展示室に足を運び、貴重な資料をじっくりと見学していました。

第 3 回　石坂洋次郎ゆかりの地について

講師：斎藤三千政（郷土文学研究家）
7 月 15 日（土）

石坂洋次郎は明治 33 年に代官町で生まれたとされていますが、それにはいくつか矛盾する点があります。本講座では様々な研究資料やエピソードとともに石坂の年譜を辿り、その生涯に迫りました。

また、講座の最後では、石坂と関わりの深い弘前市の街並みを現在の写真と比較し、石坂にゆかりのある人物のエピソードとともに紹介しました。

《お知らせ》第６回　北の文脈文学講座

10 月 22 日（日曜日）朗読「津軽の詩（うた）」
講師：下川原　久恭　氏（語る会代表）
午後２時～３時　図書館視聴覚室

第７回　〈北奥羽風土記〉弘前と横手（11/18）
講師：櫛引　洋一（企画研究専門官）

第８回　新収蔵資料　(12/16)
講師：櫛引　洋一（企画研究専門官）

郷土文学館開館記念日

郷土文学館は平成 2 年 7 月 1 日に開館し、今年で 27 年目を迎えました。当館初の試みとして、1 日･2 日を無料開館し、文学に関するクイズラリー、歴代企画展のスタンプコーナーなどを行い、多くの来館者で賑わいました。

当日はスポット企画展「石坂洋次郎―エッセイに見る素顔―」の展示が始まり、石坂のエッセイ全 15 冊を展示しました。

2 階のラウンジスペースを活用したアコースティックギターのコンサートも催され、映画「青い山脈」の主題歌の演奏など文学館らしいコンサートになり好評でした。

歴代企画展のスタンプコーナー

クイズラリーの答えさがし熱心に展示を見ています。

ギターコンサートのようす。

ご来館いただきありがとうございました